

緋弾のアリアの世界に 転生!?

ふわふわ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは緋弾のアリアの世界にフランとなった主人公が転生するお話です

目次

原作前

第一話 転生!! | 1

第二話 伊・U | 8

第三話 理子と吸血鬼 | 27

武偵中学編

第四話 武偵付属中学入学!

41

第五話 ランク考査VS学生編

52

第六話 VS三年生 | 59

第七話 VS安藤 | 65

第八話 | 71

第九話 | 81

第十話 | 86

第十一話 | 99

原作前

第一話 転生!?

初めましてふわふわです！

初投稿なので誤字脱字などあるかもしれませんが宜しくお願いします（・・・△・・）
ノヨロシク

ここはどこだ？

真つ白な空間が目の前にある。

「ここは生と死の境じゃよ」

はい？

目の前には老人が立っていた

「お主はトラックに轢かれて死んでしまったのじゃよ」

すると俺の頭はあのことが鮮明に思い出される

……俺死んだんだ……

「ああ確かにお主は死んだのじゃがなんと抽選でお主が転生することが決まったのじゃ」

へ？

「あのお、冗談はその辺で」

「冗談じゃないんじゃ」

「お主には被弾のアリアの世界に転生してもらう」

うわー死亡フラグ立ちまくりのところじゃん

「そこでお主には特典を付けて転生してもらう」

「特典？」

「なんでも好きな特典を選んでよい」

「何でも?」

「そうじゃ」

じゃあこの世界では最強になるかなあ

だったら「能力を作れるようにして」

「身体能力をヒステリアモードの金二君の100倍を素にしてください」

あと、「俺をフランにしてください」

「何でじゃ?!」

「これぐらいじゃないと生きていけないかなあっと思つて」

「東方の技はなんでも使えるようにしてください」

「分かった」

「転生する時間はいつが良い?」

「原作の十年前で」

「分かった」

「それじゃあ頑張つてな」

「ありがとう」

そうして俺は扉をくぐって行った

知らない天井だ

そうして体を起こすと異変を感じた
ん？なんか視界が低いような気が
そう思っただけ鏡を見ると：

フランの姿になっていたのだ

「わぁー！！」

と、ハスキーボイスの声が出た

机の上には

「無事転生できたようじゃな。お金は10億ほど銀行にあるから心配無用じゃ。早めに
能力とか力を蓄えておくんじやよ」

と書かれていた

じゃあ早速試してみようかなあ

とりあえず最初は、『妖力が一日に二乗倍ずつ増えていく』能力を作った

外に出て 息を吸って空を飛んでみた。

「わあー」

「飛んでるー」

簡単に飛ぶことができた。

次に妖力弾を打ってみた

すると

「バーーン」

えっ 強すぎ…

少し弱くしてみると

「おー」いい感じ

その後…

弾幕を張ることもできるようになった

さらに フランの東方での技も半日してできるようになった。

一番の収穫は

自分の能力を、狂気に囚われることなく制御できるようになった事だ

「あー」「疲れたー」

今日はもう寝ることにした

「明日は何をしようかなあ」

と考えながら眠りに落ちていくのであった。

6年後

ある日

「今日は何をしようかなあ」

少女考え中

「そうだ！」

「原作前に伊・Uに行ってみよーっと」

「あつ、でもどこにいるんだろう？」

「こうゆうときに能力を作ればいいんだ！」

『地球のありとあらゆる場所を知ることが出来る能力』を作った

「えーっと、あー！いた！」

そこは水中だった

それなら「時よ止まれ」

周りが止まった。

ここから「テレポート！」

と、この場から瞬間移動した

第二話 伊・U

「時よ動け！」

「あなた誰？」

（うわあ、びつくりしたあ）

「私はフランドールスカーレットって言います」

「私はカナだよ。それにしてもあなた急に現れたけどどうやったの？」

「それは秘密です！」

「自分の戦力を見せないことはよいことだと思おうよ」

「ありがとうございます！」

「でも…ここは海中だよ。どうやって来たかだけでも教えてくれない？」

「うーん…簡単に言うとは転移してきたってことかなあ」

「転移？」

「うん！空間をこじ開けてそこから座標を指定して行くんだよ」

（この子相当ヤバいわね）

「いきなりなんだけどあなたを教授の所に連れて行くわ。」

「どうして？殺すの？（ノ口、）シクシク…」

「いや殺すつもりはないけど教授ならあなたのことは推理されていることでしょうからそこに連れて行くだけだから泣かないで、大丈夫だから。ヤバそうだったら私も説得に加わってあげるから…っね？」

「う、うん」

「じゃあ行こうか」

二人移動中

コンコンコン

「入り給え」

「失礼します」

「ん？その子は誰だい？」

「えっ、教授も推理できていなかったんですか!？」

「いいや、大きな災いを起こす力を持つ娘がここへ来るといところまでは推理できていたが、いつ来るのかは推理できなかったよ」

（教授が推理できなかったなんて）

「早速なんだが質問をしていいかね？ん？どうしたんだい？」

「ガクガクブルブルガクガクブルブル」

「ああ、教授、この子はあなたに殺されると思っているんですよ」

「いや、僕はそんなことはしないよ。むしろ僕の推理を超えてきた子なんて興味しかないものだよ。君名前は？」

「フ、フランドールスカーレットです」

「フランドール君：何か聞いたことがあるようなないような。そんなことは良いから僕と戦ってみないかい？」

「教授！この子はあなたを怖がっているのですよ！そんな子に恐怖心を与えとはどうゆう神経しているんですか!？」

「大丈夫、僕は君を殺そうとも微塵も思っていないよ。」

「ほ、ほんと？」

「そうだとも。むしろ君のほうが強いんじゃないかと推理しているよ」

（さすがにそれはないと思うけど……教授は過大評価をしていらつしやるのかな？）

「どうだいフランドール君、戦ってみようと思わないかね？」

「わ、分かりました。だけど一つお願いがあります。」

「なんだね？」

「私の技は相当危険です。私の攻撃は当たり所が悪ければ死んでしまいます。それでもいいですか？」

「おおー！やはり僕の推理は間違っていないかったようだ！むしろ良いとも！さあ！僕を殺しにかかる気で攻撃してくれ」

「分かりました。カナさん」

「ん？どうしたの？」

「今からあの人と戦うので少し離れたほうが良いと思います。流れ弾でも十分殺傷能力はあるので……」

「分かったわー。じゃあ私は向こうから観戦してるねー。頑張つてねー！」

「ありがとうございます！」

「それじゃあフランドール君、準備は良いかね？」

「はい、大丈夫です。」

「では、カナ君始めの合図をお願いするよ」

「分かりました。…では始め！」

「先手は君に譲るよフランドール君。レディーファーストと言うからね。」

「分かりました。では今から打つのが常に飛んでくると思ってください。」

「ん？常に？」

「では弾幕展開！」

スピードは大体銃と同じ速度で弾がフランの体から無数に放たれていく

「これはどうやって打っているのかね？」

「まだ秘密です。」

「そうかい、じゃあ僕も攻撃させてもらおうとしよう。」

ヒュンヒュン シュツ シュツ

「瞬発力は良いね。僕の突きを躲すなんて。」

「ありがとうございます！」

「でもこれならどうかな？」

バンバンバン

「うわあ、危ない。あとちよつとで当たっていました」

「これも避けるかい」

「じゃあこつちからも行きますよ………弾幕展開！」

「さつきと同じものはつうじn………何！」

そこにはさつきの十倍もの超高密度な弾幕が張られていた。

(これは避けられない！被弾するのは怖いが1、2弾なら大丈夫だろう………っ！)

シャーロックは一発被弾しただけで20メートルほど飛ばされていった。

(なんなのこの子は！あんな高速、高密度、高攻撃力の弾を撃ち続けられるなんて………一発でも被弾したら教授のようになってしまっなんて………)

「いやあ、今のはなかなか痛かったよ。しかし僕が一発被弾するだけでこんなに飛ばされるなんてね。想定外だったよ」

「でも、まだまだこんな準備運動ですよ」

「なんだ（です）って!!」

「じゃあ特別に私の攻撃の上位を見せてあげます。」

「いまので下位だったのか」

フワリ、そのときフランが空中に浮かんだ。

「なんっ!」

「人間が、ましてはこんな幼い子が空中を飛ぶなんてありえない（わ）!」

「だからこれが秘密です! 私は吸血鬼です! なぜかこの世界の吸血鬼は空を飛べないのですが…なんででしょう?」

「それは僕にも分からない。つまり君は人間じゃないということかね?」

「そうです」

「そうだったのか、では上位の攻撃とやらを見せてくれ」

「分かりました。しかし、死なないでくださいね! フォーオブアガイド!」

「なんだ（です）って!」

彼女が四人になったのだ

「シャーロックさん」

「もつと攻撃するから」

「死なないでね？」

「それじゃあ行くよ」

「「弾幕展開！」」

四人のフランが同時にさっきの高密度の弾幕を展開してきた

「これはっ！一人一人が違う動きをしている！っならば！」

シャーロックが緋色に輝きだした。

「これが僕の最高の攻撃さ…緋天！」

シャーロックの指から赤い光が飛び出していった

「「これは避けられない！」」

とっさに全員のフランが前に出て

「「クーリアンセ！」」

緋天とフランの防御が当たる刹那強大なエネルギーが発生して

ドコオオオン

巨大な爆発が起きた

「っ！」

煙が晴れていくと

「んな！」

「結構緩い攻撃でしたね。クーリアンセ一枚も破られなかったとは」

煙の中から無傷のフランが出てきたのだ。

「じゃあ最後の攻撃にするね。レーヴァテイン！」

すると一本の真紅のレーザーが出現して、赤い小弾を軌道上に配置して空間を横一字に横切る攻撃を繰り出してきた。

「これは！まさか！」

「そうですよ、これはモチーフは北欧神話に登場する武器『レーヴァテイン』。

レーヴァテインは『炎の剣』または『炎の杖』とも言いますね」

「こんな神話に出てくる剣を君がもって、うわぁー！」

ドコオオオオオオオオン

さつきとは比べ物にならない威力にシャーロックは壁にたたきつけられた

「カハッ！」

「あのお大丈夫ですか？」

「こんな戦いをしたのにフランは汗一つかいていなかった。

「き、君はとんでもないね。僕が完敗なんて二回目だよ」

「いやいや、私のレーヴァテインまで出させるなんて初めてでしたよ」

「ちなみにそのレーヴァテインは最上位かね？」

「いや、あと何個か上にありますよ。見てみますか？」

「いや、やめておこう。このままだと死んでしまうからね」

「分かりました。カナさん？」

「ど、どうしたの？」

「私帰ろうと思うんですけど：帰っていいの？」

「いや、今日はここで休みたまえ。君についてもっと知りたいからね」

「分かりました、」

「それじゃあ中に行こうか」

「はい」

さっすきの戦闘時とは全く違う年相応の態度に変わっているフランを見て

（この子は敵対したらお終いな。あんなの私だったら弾幕一人でやられていたわ。もつと私も頑張らないと）

「カナさんどうしたんですか？」

「ん？ちよつと考え事してた。ごめんね」

「早く行こう！」

「そうね、行きましょう。」

三人移動中

「そういえばいきなりフランちゃんはここに来たけど、どこでも行けるの?」

「うん! 座標さえ指定すれば海でも宇宙でも一秒足らずで行けるよ。だって時間止めているから」

「そんなことが出来るなら攻撃で使えばいいんじゃないの?」

「それも考えているんだけど: それだと絶対避けられないじゃん?」

「たしかにそうだね、あんなの普通でも避けられないのに急に現れたら……おしまいだね」

と物騒な話をしていたら

「さあ! フラン君ここがみんながご飯を食べているところだよ! 一緒に食べよう!」

「わわあ、人がいっぱい」

「ここにいるのは私の生徒というところかな? それじゃあ入ろう!」

「待ってドアノブに手が届かないよ!」

フランは身長130しかないのだ

「それじゃあフラン君、僕が運んであげよう」

と、シャーロックはフランをお姫様抱っこして持ち上げた

（とつても軽い。しかしこの体にあの攻撃を出す力があるなんて想像もできないな。特に主戦派の子たちは気が荒いからフラン君に攻撃しかねない。どうせフラン君なら避けられると思うがそんなことはさせないようにしよう）

「いやいやみんな元気かね？」

「教授！つて誰だ？」

「この子はフランドール君だよ。みんな仲良くしてやってくれ。さあフラン君自己紹介をしてね」

「フ、フランドールスカーレットです。よろしくお願いします。」

「おいシャーロックなんでこんな子を連れてきた？俺がもらつて良いか？」

一番最初にしゃべったのはブラドだ。ブラドはこのNO2だが気性が荒いからどうかと思う。奴は「無限罪のブラド」と言われる吸血鬼だ。しかしフランドール君とは全く違い空も飛べないから絶対にフランドール君には勝てないだろう。いや断言していいだろう。

「だめだよブラド君、この子は今日来たばかりなんだから、優しくしてあげなさい」

「こんな子にか？はっ！笑わせてくれる」

「確かに可愛いのお。妄の生贄にしても良いか？」

「いや、この子は俺がもらう。」

などと自分勝手なことを言っているので

(この子たちは戦力さも見抜けないのか……いや、フランドール君がうまく隠しているからか……それにしても被害が出ないように真実を言っておいてあげよう)

「みんなよく聞いてくれ、この子は君たちなんかよりもずっと強いぞ。僕だって完敗したのだから君たちには勝てるはずがない。」

「「「なん(じやと)だってー……」」」

「僕の忠告をよく聞いてから行動するようにしたまえ。さあフランドール君一緒に食べようー!」

「う、うん分かった」

研磨派目線

「みんなよく聞いてくれ、この子は君たちなんかよりもずっと強いぞ。僕だって完敗したのだから君たちには勝てるはずがない。」

と教授は言っているがそれは本当なのだろうか? いや、教授はいまボロボロの恰好をしているがあの子は全くの無傷だ。そんな子がいるのか?

「ねーねージャンヌー。あれどう思う?」

「それは私にも分からないが教授はうそを言ってるようには見えない。おそらく事実だ

ろう。伊・Uの中で教授をこんなのにできる者はいないからな」

と、しゃべる子はジャンヌダルクだ。

「私よりもちっちゃいのに教授よりも強いなんて……」

と語るのは峰・理子・リュパン四世だ。あのアルセーヌリュパンのひ孫だ。

とそこに

「いやあジャンヌ君たちここ良いかね？」

と教授が言ってきた。

「ふえ？いいですよ」

ジャンヌはびびりして変な声が出ている。

「ありがとう。フランドール君こっちだよ」

「はぁーい」

とやはりとても幼い子がこっちへ来る。

「僕の横に座りたまえ」

「分かりました」

「それじゃあ食べよう！遠慮はいらないよ！」

「ありがとう」

声はハスキーボイスだ

「そうそうフランドール君、さっきの弾幕はどうやって撃っていたんだい？」

「えーっと、私の体には妖力というものがあります。人間には霊力と言いますが分かりますか？」

「ああ、それは知っている。」

「ちよつと待って〜！この話を聞くとフランちゃんは人間じゃないみたいだけど……」

あつ 私は理子だよ〜」

「うん、確かに理子ちゃんの言うとうり私は人間じゃないよ〜」

「じゃあ何？」

「怖がらないでね」

「怖がらないよ〜」

「私は吸血鬼だよ〜」

「吸血鬼!？」

理子はブラドとヒルダという吸血鬼に最近まで監禁されていたのだ

「安心して？私はいじめたりしないしみんなと仲良くしていきたいから」

「うん！分かった〜…あつ教授話をさえぎってしまったてごめんなさい」

「全然大丈夫だよ理子君、それでフランドール君さっきの続きをお願いできるかね？」

「あつはい、私はその妖力を体の一点に集めてそこから外へその力を放つのです。」

「原理は良く分かったよ。しかしそれをどうやって外へ出すんだい？」

「それは練習すればだんだんコツがつかめてくるので最初は外に暴発することもありま
すけどすぐに制御できるようになりますよ」

「フランちゃんはどうぐらいで出来るようになったの？」

「一日かからなかったかな？」

「「マジですか」」

「それでも人間でも一年かからないと思いますよ人によりますけど」

「じゃあ私もできる？」

「うん！できるよ…でも」

「でも？」

「これは人間がやるとーっても疲れるよ？」

「それでもやってみたい」

「僕もやってみたいよ」

「私は遠慮しておこう。なんせとても力を消費したら力が使えないからな」

「そういえばフラン君は疲れないのかい？僕の場合は超高密度だったけど」

「私は妖力がとーってもあるのであの程度なら大丈夫です。あれなら一日ぐらい
撃ち続けられますよ」

「それは大変だ」

「そんなことはしませんけどね」

「ねーねーフランちゃんあとでれんしゅうしよ〜!」

「僕も参加させてもらおうよ」

「分かりました。じゃあ一番広いところに連れて行ってください。」

「了解したよ。でも今はたくさん食べよう!」

全員食事中

食後

「おなかいっぱいです。ありがとうございます!」

「礼には及ばないよ。じゃあ行こうか」

「はーい」

三人移動中

「ここだよ」

「じゃあ練習しよう!」

「まずは、自分の心臓付近に力を集中させて」

「うーうー。あつなんかあつたかい感じがする!」

「僕も同じだ」

「二人とも早いんですね。じゃあ次はそれを一点にあふれるぐらい集中させて」

「うーんうーん。なかなか集まらないなあ」

「ん？なんだか光ってきたよ」

「さすがシャーロックさんですね。もっと力を加えて手を前に出しててください」

「こうかね？」

「そうです。おそらくもうすぐでいっぱいになるので手の上に出てくると思います」

「おっ！出てきたよ！」

「それをターゲットに当ててください！」

「ふん！」

ドオン

「すごい！一撃でこんな威力なんて！しかし…はあっ、はあっ。とんでもない力の消費だな」

「練習すれば楽にできるようになりますよ。そうすれば霊力も増えていきますからね」

「フラーンフラーン！なんか私も出てきたよ」

「そのまま手の上に乗せてターゲットに当ててください」

「うん分かったよそれっ！」

ドオン

「すごいよ理子君僕と威力がほぼ変わらないよ」

「人間みんな最初は同じだけ霊力がありますからね。練習すればもつと増えますよ！」

「ねーねーフランちゃん」

「どうしたの？」

「さつき教授が言っていた超高密度の弾幕見せてくれない？参考にしたからね」

「いいよ！じゃあいくね」弾幕展開！

（うわあとつてもきれいだなあ。これは避けられないよ！わたしも頑張ろうつと！）

「すごい威力だね」

「ありがとう！じゃあみんな休憩しよう」

「そうだね」

みんな休憩中

休憩後

練習後

「ありがとう！コツがわかったよ」

「僕からもありがとう」

「はい」

「ではこれで今日はおしまいにしよう」

「はい」

「じゃあフランちゃん行くー！」

「うん！」

とフランの濃い一日が終わりました。

第三話 理子と吸血鬼

理子 side

私は今、伊・Uの中を歩いている。

フランが来てから私は様々な戦闘技術を身につけてきた。

だが、まだまだこんなのじゃ足りない！

だって、もつと強くならないと、あの吸血鬼に……

と私が考えていたら。

「あら、四世！」

「……ヒルダ……」

あの吸血鬼だ。

「そんなに警戒しなくても良いのに。私はお父様とは違ってあなたを評価しているのよ」

「そんなわけない」

「……四世」

「ひっ！」

「せっかく私が評価してるのになんて態度なの？ やっぱりあなたは檻の中に居るべきだったのかしら？」

あの生活がフラッシュバックする。

嫌だ！ あんなのはもう二度としたくない！

私はヒルダから少しずつ離れていくが

「何をしてるの？」

バチバチ！

「あっ！」

ヒルダの超能力で私は感電してその場から動けなくなってしまった。

ヒルダが私を蹴ってくる。

「うっ！」

「あなたは所詮繁殖犬。ただの遺伝子なの。犬は犬らしく首輪でもかけておこうかしら」

そう言ってまた私に電流を流そうとしたとき

「理子ちゃん!？」

私が最もよく聞き知った声がかげられた。

「フランちゃん!」

フランちゃんが偶々通りかかった。

「えーつと…誰ですか？」

ヒルダに聞いている。

「あなたは私の名前も知らないんだなんて…さすがは無力な人間ね」

と言っている。

「でもあなたに特別に教えてあげるわ。私はヒルダよ。ドラキュリアよ」

「ふーん」

「なんなのその態度は！」

「吸血鬼なんだあ〜と思ってね」

「私をなめてるの？」

「そうだね〜。見るからに弱そうだし」

「許さないわ！泣いて謝っても許さないから」

「所詮ただの吸血鬼かあ」

フランちゃんはつまらなそうだ。

けど

「フランちゃん！危ないよ！ヒルダは強いの！」

「大丈夫だよ。理子ちゃん」

私はふと、何でこんなにフランちゃんの声がすぐそこに聞こえるんだ？と思ったら
「四世！何でそこにいるの」

ヒルダの声が向こうから聞こえる。

何で!?!私移動してないのに!?

「っ！繁殖犬のくせに！」

「繁殖犬？」

「そうよ！こいつは私たちのために優秀な五世を生ませるための遺伝子なのよ。だから
それと一緒にいるあなたもただの犬のお友達よ」

っ！私だけじゃなくてフランちゃんにまで！

私が弱いから…

と私が思っていたら

「……………ない」

「何？」

「……………さない」

「何よ犬？」

「許さない！私のお友達をこんな風に呼ぶなんて！」

「犬に犬と言って何が悪いの？」

「……………」

フランちゃんが下を向いて黙っている。

「フランちゃん、どうしたん……!!」

私がフランちゃんに聞こうとしたら

「アハハハハ！」

「ど、どうしたの!？」

「アハハハハ！ヒルダ！アナタハコワレナイ？」

「なんなのよコイツ！私は死なないわ！だって吸血鬼だもの」

「ソウナンダ！ジャア、アナタノツミヲコウカイシテネ？」

「そんなことはしないわ！」

「ジャア、サヨウナラ！」

ザシュツ！

「うわあ！」

ヒルダの体が真っ二つになった。

しかし

「なっ！」

「私は死なないわ！」

途端にヒルダの体が再生した。

「吸血鬼には魔臓というものがあるの。それが壊されなければ私は不死身よ！」

「ソウナンダ！ ジャアコレハドウカナ？」

フランちゃんが私をフランちゃんの後ろに連れて行ってからヒルダに手を向けた。

「キュットシテ、ドカーン！」

バシユツ！

ヒルダの体が爆発？ いや、飛散した。

さらに

「レーヴァテイン！」

フランちゃんの背をも優に超える剣、しかも炎を纏っている剣でヒルダを切り刻んで

いく

「ぎやあああああああああ！」

しかしヒルダは再生する。

「スゴイスゴイ！ コレハタノシイネ！」

バサツ！

「!!!」

私とヒルダは啞然とした。

なぜなら

「何で空を飛んでいるの!？」

私は驚愕した。

「ワタシハ吸血鬼だヨ!ソノ羽でジユウニソヲトベルンダ！」

私はさっきのフランちゃんの言葉を思い出した。

「所詮ただの吸血鬼かあ」

あれはそういう意味だったんだ。

現にヒルダは空を見上げていただけだ。

「ジャア、ツツキヲハジメヨウ！」

フランちゃんが高速で飛行すると弾幕が体から放たれた。

「…何…コレ？」

ヒルダは弾幕を知らないんだ。

「こんな光る弾、当たっても関係ないわ」

いや、違う。

あれはとんでもない威力なんだ。

やはり

「あああああああー！」

ヒルダが被弾して羽がもぎ取れた。

私は見てられなかったので、シャーロックの所へと急ごうと思ったら。

「いやあくともないことになってるね〜」

「いつからいたんですか?」

「初めからだよ。推理でこうなることはなんとなく分かったからね。しかし、あの初めのほうの「キュットシテ、ドカーン」の原理は全く分からなかったよ。」

「これって止めたほうがいいんじゃないですか?」

「そうだね。でも周りを見てごらん」

「周り…ですか?」

「こんなに派手にやってるのに船内は傷一つついていないんだよ。」

「それは…どうゆうことですか?」

「いいかい? あんな攻撃では一瞬でこの船は吹き飛ぶ。しかし、そうやっていないということは…彼女はその攻撃をしながら周りに結界、つまり防壁を張りながら戦っているんだよ」

「そんなことが…」

「つまり彼女はまだ本気を出していないということだね。僕にもどこまでかは推理できないよ」

「そう…なんですか」

「ああ、そろそろ止めにかかろうか」

シャーロックが歩いていこうとしたら

「ぎやあああああああああ！」

「やめてやめてやめて!!!」

「ああああああああ!!!」 バタリ

ついにヒルダが倒れた。

「終わったようだね」

「!!ごめんなさい。暴走してました」

「いいや、いいんだよ。ヒルダ君にはお仕置きが必要だと思っていたからね」

「そうですか。一つお願いがあるんですけど…いいですか？」

「いいだろう。僕の部屋にこの後来たまえ」

「分かりました。理子ちゃん、またね」

「う、うん」

シャーロックの部屋

「僕にお願いとは、何かね？何なりと言ってごらん」

「学校に行きたいんです。」

「学校かい？」

「はい」

「そんなことかい！もちろん良いよ」

「書類を作らないといけないんですけど…私だと怪しまれてしまうので…」

「それなら僕が作ろう。君は安心して学校に行きたまえ」

「ありがとうございます」

「出発はいつだい？」

「明日にしようと思ってます」

「それは突然だ。じゃあ明日までに書類を作っておくよ。学校はどこだい？」

「神奈川武偵付属中学校です」

「そうかい。じゃあ頑張ってくれたまえ。また会うことになると思うがね」

「？」

「今日はもう行きたまえ。理子君としつかりとお話しておくんだよ」

「分かりました。」

理子の部屋

さっきのフランちゃん強かったな〜!

私もあんなふうになりたいな〜!

すると

「理子ちゃん?」

「フランちゃん?」

「入って良い?」

「良いよ!」

「おじやましまあ〜す」

フランちゃんが悲しそうな表情で入ってきた。

なんだろう? 嫌な予感がする。

「どうしたの?」

「実は…ここから出ていくことにしたんだ。」

「何で!」

「私も学校に行きたくなかったから…」

「そうなんだ…」

「うん…」

「でも、また会えるよね!」

「もちろんだよ！」

「じゃあ……一緒に寝よ？」

「いいの？」

「良いよ！」

「分かった！じゃあ部屋に行つて服を取ってくるね」

「分かった！じゃあ待つてるね！」

「うん！」

10分後

「お待たせ〜！」

「やっと来た〜！こつちだよ〜！」

大きなベッドがある。

フカフカそうだ。

「今日はたくさんお話しようね！」

「うん！」

少女たち会話中

会話後

「ふわあ。眠たくなってきたね〜」

「そうだね〜」

「そろそろ寝よつか〜」

「そうしよう」

「フランちゃん」

「ん？」

「これからもずーつとお友達だよ〜！」

「もちろん！」

と私たちは眠っていった。

次の日

「おはよ〜」

「おはよ〜！」

「じゃあ、いこっか」

「…うん」

シャーロックの部屋

「そろそろ来るだろうと思ってたところだよ」

「そうですか」

「これが書類だよ。」

「ありがとうございます」

「それじゃあ頑張ってきたまえ」

「それじゃあ理子ちゃん、またね！」

「うん！またね！」

「ザ・ワールド！」

と言った途端、フランちゃんは消えた。

行っちゃったか

私も頑張ろう！と思った

武偵中学編

第四話 武偵付属中学入学！

「ザ・ワールド！」

私は日本に戻ってきた。

場所は神奈川の小さいアパートの一室だ。

ん？何で家があるかって？

それはシャーロックさんが確保しておいてくれたんだ！

小さいんだけど学校にも近いらしいんだ！

ちなみに転入って形になるらしい。

明日学校に行くようだ

楽しみだな！

制服は制服は…つと あった！

新しい制服を試しに着てみた。

うん！防弾性も優れてるから良いね！

試しに部屋の中を飛んでみた。

うん!羽も締め付けられなくて楽だし、これ最高じゃん!

私はそれから能力の最終確認をして寝ることにした。

明日は楽しみだなあ!

金一さんの弟のキンジ君にも早く会いたいなあ

私は吸血鬼だが夜だけに活動するのではない。

別に昼にも動けるようになったし夜も寝ることも普通にある。なので

ふわあゝ眠たゝい!

私は睡魔に襲われ眠っていった。

翌日

チュンチュン

鳥の鳴き声で私は目を覚ました

時間は…6時だ。

うん。いい時間に起きられた。

初日から遅刻とか笑えないからね

私は全て用意を済ませ朝食も食べた。

時間は…7時30分だ

学校は8時30までに行けばいいからあと20分ぐらいしたら行くつと

……7時50分

よし！行こう！

私は家を出て、外に出た……が

道が分からない!!!

えーつと！えーつと！どっちだ!?

……分らない……どうしよう

周りには全く人がいない。

どうしよう……グスン

私が泣きかかっていると

「おい」

「ひっ！誰!？」

「お前……武偵中の生徒か？」

「……はい……なんで？」

「俺の学校の制服だ、それ」

「えっ!」

「なんでこんなとこ一人で歩いてるんだ？学校は反対方向だぞ」

「実は……転入生で道が分からなかったんです」

「ああ、そうか」

「もしよかったら道を教えてくれませんか？」

私は上目遣いに相手の人を見る……と

キンジ君だ！

やっぱりお兄さんに似てるね！

キンジ君はなんか赤くなったよ？

「あ、ああ良いぞ」

そっぽを向いて言った。

「ありがとう！お名前を聞いても良い？私はフランドール・スカーレット フランって

呼んでね！」

実際私は彼の名前を知ってるんだけど、あえて聞いてみる。

「俺は遠山キンジだ」

やっぱり！知ってたよ

「それよりもフラン、そろそろ行かないとだめだぞ！」

「何で？」

「転入生は教務課に行かないといけないらしいからな」

「そうなんだ！じゃあ行こっ！」

二人移動中

「これからの道をちゃんと覚えておけよ」

「うん！」

実は私方向音痴なんです！

多分またこうなると思います！

なんてことは言えないよね

「着いたぞ」

「ありがとう！あつ、教務課までの道も教えて？」

「ああ」

「ここだぞ。」

「ありがとう！じゃあまたね〜！」

教務課

コンコンコン

「誰だ？」

「転入生のフランドール・スカーレットです」

「ああ！入れ」

「失礼しまゝす」

「お前が転入生か」

「はい」

「俺は安藤だ。ここの先生はそれぞれ担当の戦闘技術を教えることになっている。ちなみに俺は拳銃だ」

「分かりました。でも先生?」

「なんだ?」

「なんでナイフ術を教えないんですか?」

「……どうしてそう思うんだ?」

「先生の服から金属の臭いがとてもします。おそらく服の中に大量に隠し持っているんじゃない?」

「…ほう、一般中出身にしてはやるな」

ほんとは世界的にもヤバい組織に所属してたんだけどね」

「ありがとうございます」

「今日は授業後、ランク考査というものをやる」

先生の説明によると、専攻したい科目のテストをやるらしいんだ!

もちろん私は強襲科だよ!

この学校にはたくさんの学科があるらしいんだ！

それで私が入る強襲科のテストは……一対一の勝負だつてく

…はつきり言つてつまらない。

どうせここの生徒でしよ

どうせなら30人ぐらいがよかつたな

でも、そんなことは言つてられないのでおとなしく従うことにした。

うん！瞬殺しよ！

と私が考えていたら

「ブランドールさん！こつちですよ」

女性に声をかけられた

「あなたのクラスの教師になる鈴木です」

「よろしくお願いします！」

「あなたのクラスは3年4組です」

「分かりました」

「じゃあ教室に入らず待つてね。サプライズつてことにしてるから」

「分かりました〜！」

先生が

「皆さん！座ってくださいーい！」

ガタガタ

みんなが机に向かって歩いて、椅子に座る音が聞こえる。

「今日は転入生がいます！」

ざわざわ

教室内がざわつく

緊張するな〜!

「じゃあ転入生さん、入ってくださいーい！」

ガラガラ

私は教室のドアを開けた

そしてみんなの方を向くと

ざわざわ

またも、どよめいた

「じゃあ、自己紹介をお願いします」

「えーっと、フランドール・スカーレットです！フランって呼んでくださいー！」

……えつと〜みんなの反応が…

と思っていると

「キャー……！可愛い!!」

「ウオオオオオオオオ!!! よっしや……!!!」

と騒いでいる。

良かった〜!と私は思った。

「じゃや何か質問がある人はいますか?」

「はい!!!」

多くの生徒が手を挙げた。

「じゃあ〜好きな食べ物って何〜?」

「えーっと、プリンかな?」

「可愛い〜〜〜!!!」

「じゃあ〜、好きなタイプの男性は?」

いきなりだなあ〜

「うーん、イケメン?」

「「お……!」」

「はいはいはい〜!じゃあ〜………」

と質問の嵐が来た

数十分後

「はい、そこまでですよ〜!」

は〜! やつと終わった〜!

「じゃあ席は…遠山君の隣ですね〜。そこが空いてるから」

「は〜い!」

「キンジ君! よろしくね〜!」

「あ、ああ」

「おい! なんでキンジはフランちゃんを知ってるんだ!」

「そうだそうだ!」

「何でキンジだけ!」

「それは……」

「今日キンジ君に道を教えてもらうために、一緒に登校したからだよ〜!」

「お、おい!」

「?」

なんでだろ?

私が考えてると

「キーーンジ!」

「後で殺す!」

「これは後でOHANASHIだな！」

授業後

「おい！ちよつとまつt…うわあああああ！」

なんか連れてかれちやつたよ？

大丈夫かな？

いや大丈夫じゃないだろう

まあ〜頑張つて？

私は午後からランク考査があるらしいから頑張らなくちや！

第五話 ランク考査V S 学生編

午後の授業開始

午後の授業はそれぞれの専攻科目を受けることになっているが、私はランク考査というものを受けることになっている。

もちろん上位のランクを狙うことだよ！

武偵ランクには下からE D C B Aとあり、その上にSというものがありこれは、その道のプロと言っても差し支えないほどの能力を保持していると評価され、その上にはRというランクがあるらしいが世界に7人しかいなくて、ロイヤルランクともいわれているようだ。

私が受ける強襲科は、Sランクだと特殊部隊1個中隊と同等と評価されるんだ！

私が強襲科の体育館？に先生と一緒に来ると、

「「フランチャージャー！頑張つてね〜！」」

「ブランドール、来たか、」

「あつ安藤先生！先生と戦わないんですか？」

「あほか！先生が生徒と戦うなんてないぞ、あつても模擬戦だ」

「そうなんですか、残念です」

「まつ、精々頑張れよ。ちなみに相手は二年生だ。まあ、一般中なら負けると思うがな」

「は〜い」

「じゃあ下に行くぞ」

「は〜い」 ふわあ〜

「ずいぶんと余裕そうだな」

「いいえ」

実際は余裕なんだけどね〜。まあ、誰が出てくるか分からないから油断禁物だね！

それに、瞬殺すればもつと強い人が出てくるかもだしね！

言い忘れてたんだけど私って戦闘狂なんだあ〜！

ウフフ〜 私を楽しませてね？

二階の戦闘訓練所

「おい、2年の奴、全員来い」

ざわざわ

ぞろぞろ

二年生の方がたくさん来るね〜！

「なんだなんだ？」

「何で呼ばれたんだ？」

「なんか先生に呼ばれたらしいんだけど」

「まあ、戦闘だったら負けることはないな〜！」

等となめたことをことを言ってくれるね〜！

ちよつと気持ちちを折ってあげよ〜つと！

「集まったか。じゃあ今から3年の転入生のランク考査を行う。もちろん負けたらお前たちのランクに響くが、勝てば点数は加算しよう。さあ！誰かやるやつはいるか？」

「俺だ！」

「いや、俺がやる！」

「ふざけんな！俺に決まってるだろ！」

「なんかみんながやりたいって言ってるんでみんなでかかってきていいですよ〜！」

「何を言ってる、お前は一般中だ。一人でも負けるはずなのに、何十人もやったら死んでしまうわ」

「大丈夫です。私もちよつとストレスたまってるんで」

私がすこ〜〜しだけ妖力を開放すると

「なん！おまつ！」

「先生？いいですよね？」

「あ、ああ」

「おい二年！今からランク考査を手伝ってもらおう。だが、相手は一般中だ。勝てばランク考査推薦をするが負けたらそいつはランク一つ落とす。さあどうだ！」

「「もちろんやります！」」」

「それじゃあ相手はこいつだ！こつちにこい！」

「は〜い」

「「はっ？」」」

「よっしや〜！余裕だ！」

「これでランクが一つ上がるかも！」

「儲けもんだ！」

等と口々に言っている。

ほんと……ナンダロウネ？

「みんななめてちゃ負けちゃうよ？」

「なめるな！」

「そうだそうだ！」

「それじゃあ全員準備は良いか？」

「二は（〜）い!!!」

「それじゃあ…はじめ！」

「誰から行く？」

「じゃあ俺だ！」

「いや、俺だ！」

「俺だろ！」

「ふくん？じゃあ一番最初の人、サヨウナラ！」

「……………」バタリ

「二二はっ？」

「何が起きたんだ!？」

「俺にも分からねえ！」

「じゃあさつき二番目に言った人も、サヨウナラ！」

「……………」バタリ

「……………ちよつと待ってくれ」

第六話 VS 三年生

「それじゃあ、俺と戦う前に三年と戦わせる。」

「三年……ですか？」

「そうだ。まだそんなに訓練されていない二年だ。しかし、相手はもつと訓練された三年だ。これに勝つことが出来れば俺は戦ってやる」

「本当ですか！ わっかりました！」

「それじゃあ二年、三年の強襲科を呼んで来い」

「分かりました」

10分後

「何で呼ばれたんだ？」

「さあ？」

「なんか戦いするって聞いたよ」

「だれとだ？」

「なんで全員呼ばれたんだろう？」

三年生が集まってきた

「あれっ？フランチゃんだ〜！」

「ほんとだ〜！」

「今日、ランク考査だったね〜！」

「おい、集まったな、これからお前たちに戦ってもらおう」

ざわざわ

「相手はフランドールだ」

えっ？

マジ？

みんながざわついている

「全員用意しろ、3分後に開始だ」

「わかりました」

さっきの二年生とは違って楽しめるといいなあ〜

でも…本命は

先生だ！

三分後

「それじゃあ……始め！」

バタン

早速一人墜ちた

「「なんつ!!!」」

やっぱりみんなびつくりしてるね

「全員で畳みかけるんだ！」

バスバスバスバンバンバン

30人が同時に撃ってきた

しかし

今回はそのまま避けることにした

そのままその場で体重移動するだけで避けることにした

私の横を無数の弾丸が通っていく

「何で当たらないの!?!」

「銃弾を避けるとか……」

「みんな〜!そんな油断していると負けちゃうよ〜?」

私は初めてみんなの前で弾幕を展開した

「「!?」」

「なんだこれ？」

「きれい〜！」

ゆっくりと弾幕が近づいていき

「これ、きれいだね〜…うわあ！」 バタン

「確かにきれいだね〜…痛っ！」 バタン

「マズいぞ！避ける！」

と言ったところ

「なんっ!!」

急に弾幕のスピードが上がった

「「きやあああああ！」」 バタンバタン

「「うわあああああ！」」 バタンバタンバタン

ここにいる全員が倒れた

その時間僅か5分

三年生が全滅した

安藤 side

「ありえない！三年が5分で全滅だど!?!」

とそこに

「先生どうしましたか？」

「遠山！」

「この状況を見ると…すごいですね」

「何とかしろ！」

Flan side

あれっ？キンジ君の様子が朝と違うね〜

これは…HSSかな？

これなら、楽しめそうだね〜！

「キンジ君！行くよ〜！」

「おいで」

私は今までのように弾幕を展開した…が

「避けた！すごいすごい！じゃあこれはどう？」

「っ！」ダン！

キンジ君は一発被弾したが…何とか立っていた

でも

「まだまだだね〜」

「!!」バタン

キンジ君は倒れた。
あとは先生だけだ!

第七話 VS 安藤

安藤 side

ありえない！

この人数を一人で相手できるなんて……

こいつはまだ本気を出してないように見える。そんなのと戦えるのか？

「先生？」

「なんだ？」

「生徒全員倒したので……戦ってくださいますよね？」

「……………いいだろう」

「ありがとうございます！ちなみに勝利条件は何ですか？」

「どちらかが戦闘不能になるか、降参をした時だ」

「分かりました。」

「それじゃあスタートはこのコインが地面に落ちた時だ」

俺はこいつへの対応が分からないまま試合を始めてしまった

チャリン

コインが落ちた

すぐさまフランドールは銃撃してきた

狙いは俺の…両手両脚の関節だ

だが、この学校で教師をしているからには避けることぐらいできる

「避けた！」

銃撃の精度は…超精密だ。これはSランクに匹敵するかもしれないぞ

だが

「??」

俺は違和感を覚えた。

なぜ瞬殺する攻撃が飛んでこないんだ？

攻撃してこないならこっちから行くしかない

「ふっ…」ブン

俺はナイフによる接近戦をすることにした

実はこれが俺の専門科目なのだ。ナイフなら自信がある。体格的にも有利だからな

俺が接近してナイフを振ると

ガキイイイン

「!?!」なんだ！

熱い！

俺はナイフを捨てた

フランドールを見ると

長さ3メートルはありそうな巨大な剣だ。さらに火がついている

「こつちから行きますよー！」

「っーふっー！」

間一髪避けたが

俺はこの後絶望した。

なぜなら

「ぐはあー！」

俺には見えたぞ。あいつが剣を振ったときに炎と一緒に何やら黒い光？が飛んでき

て俺に当たり俺はダメージを負ったんだ

あれは3つも危険があるのか！

剣に当たってはいけない

炎も避けなければならぬ

黒い光も避けなければならぬ

これは絶望だな

あいつは片手で剣を振っていた！

もう片方で撃ってきたら避けられなくなる！

俺がそう思っていたら

フランドールが剣を振ってきた！

俺は軌道を読み、避けた…が

「パァン！」

発砲もしてきた！

これは俺に当たるコースだ！

俺が避けるところを読んで撃ってきたッ！

俺は

「ギィィンン」

俺は見せたくなかったが銃弾をもう一本隠していたナイフで切った

俺が安心したところで

ダンダンダンダン

「がはっ！」

なぜだ！後方には何もなかったはずだ！

まさか！

俺が気づいた時には剣を首元に当てられていた。さすがに炎は消されてあった
負けた

これは現実だ。

とんでもないやつが入ってきてしまったな

と内心思っていた。

「私の勝ちですね」

「そうだな」

「やった〜！」

このあどけない話し方をする子があんな戦いをしたと思うと、ぞつとした

キーンコーンカーンコーン

「今日はこれでお終いだ。ランク結果は後日通達される。今日は帰っていいぞ」

「ありがとうございます！」

フランドールは歩いていき

「フランドールちゃんすごいね〜！」

「先生に勝つなんて!!」

「やっぱりすごい！」

「ありがとうございます！」

などと女子と話しながら出て行った

第八話

私は、先生を倒し、ランク考査を終えたのだが…

「うーん、なんか物足りないな〜」

実際シャーロックさんと戦った時のような力を出すこともできなかつたし、

どうしよう〜

………

………

!!!

キンジ君に会いに行こう！

あつ、さつき倒しちやつたんだつた。

それなら医務室にいるのかな？

行ってみよう〜と

私は医務室に向かって歩いて行つたが……いた

あれっ？さつき怪我したはずなんだけど…

「キンジくーん〜」

「うおっ！フランか」

「なんなのその反応？」

「おい 抱きつくくなよ！」

「？なんで？」

「それは……………」

「ちよつと動かないでね？」

「なんでだよ」

「うごかないで」

「わ わかったよ」

「それじゃあ……………」

私はキンジ君の首筋を撫でていく

「ふ、フラン？」

「ん？」

「何やってるんだ？」

「キンジ君の秘密を探してるんだよ」

「なん！」

私はキンジ君の動脈を見ると

うん！金一さんと同じ素質の遺伝子が流れてるね
なので

「分かったよ」

「……何がだ？」

「キンジ君の体質だよ」

「っ!!!」

「これはその人の知られたくないことだから、言われたくなかったら言わないから言つて？」

「……じゃあ聞かせてみる」

「うん」

「…」

「キンジ君の体質は……ヒステリア・サヴァン・シンドロームだね」

「っ!!!」

「どう？」

「……正解だ」

「あつ大丈夫だよ、私は別に嫌いになつたり悪用したりしようとは思わないから」

「！本当か？」

「それはその人の体質だから、なりたくて生まれてきたわけじゃないんでしょ？ だったら私はそこを嫌ったりしないよ」

「……………ありがとう」

「そういえばキンジ君は医務室行ったの？ さつき私と戦ったから怪我したんじゃない？」

「いや、俺はよく投げられたりするから怪我は日常茶飯事だ」

「そう…なんだ。」

「俺は帰るが…お前は どうするんだ？」

「私も今から帰る予定だったんだ」

「よかったら俺の家に来ないか？」

「えっ？」

「お前は戦闘力が半端なく高いから合わせたい人がいるんだ」

「うーん…分かった！」

「それじゃあ行くか」

「うん！」

二人移動中

キンジ side

俺はさつきなりたくもないのに俺の体質を利用されたんだ。

俺の体質は性的興奮によってβエンドルフィンが一定以上分泌されると、神経伝達物質を媒介し大脳・小脳・精髓といった中枢神経系の活動を劇的に亢進される。その結果ヒステリアモード時には思考力・判断力・反射神経などが通常の30倍にまで向上する。特異体質だ。

その代わり、女性のことを最優先で考えることで物事の優先順位付けが正しくできなくなったり女性にキザな言動を取ってしまうなどの反作用があるので俺はそれが嫌なのだ。

さらに俺はそれを無理やりされ嫌なんだ

しかも今日はHSSだったのに完敗したんだ。それは

「キンジくーん！」

「うおっ！フランか」

今考えていたやつが来た。

フランは今日俺に圧勝したのだ

等と考えていたら

「なんなのその反応？」

フランが抱きついてきた

マズい！またアレになつてしまふ！

「おい 抱きつくなよ！」

「?なんで？」

「それは……………」

性的に興奮しちゃうから…なんて言えるわけないだろ！

「ちよつと動かないでね？」

「なんでだよ」

「うごかないで」

「わ わかったよ」

「それじゃあ……………」

フランは俺の首筋を撫でていく

体に寒気が走る

「ふ、フラン？」

「ん？」

「何やってるんだ？」

「キンジ君の秘密を探してるんだよ」

「なん！」

俺の秘密だっけ!?

まさか……

「分かったよ」

「……何がだ？」

俺は最悪の結果を知られてしまったかもしれないと思った

「キンジ君の体質だよ」

「っ!!!」

やっぱり！

「これはその人の知られたくないことだから、言われたくなかったら言わないから言っ

て??」

「………じゃあ聞かせてみる」

「うん」

「…」

「キンジ君の体質は………ヒステリア・サヴァン・シンドロームだね」

「っ!!!」

知られてしまった

「どう?」

「……正解だ」

「あつ大丈夫だよ、私は別に嫌いになつたり悪用したりしようとは思わないから」

「!本当か?」

これを知つて嫌いになつたり悪用したりするはずなのに……

「それはその人の体質だから、なりたくて生まれてきたわけじゃないんでしょ? だったら私はそこを嫌つたりしないよ」

「……ありがとう」

女からそんなことを言われたことなんて初めてだった

「そういうえばキンジ君は医務室行つたの? さっき私と戦つたから怪我したんじゃない?」

「いや、俺はよく投げられたりするから怪我は日常茶飯事だ」

「そう……なんだ。」

「俺は帰るが……お前は どうするんだ?」

「私も今から帰る予定だったんだ」

「よかつたら俺の家に来ないか?」

「えっ?」

「お前は戦闘力が半端なく高いから合わせたい人がいるんだ」

「うーん…分かった！」

「それじゃあ行くか」

「うん！」

フランス side

私はキンジ君と歩いている。

学校から20分程すると平屋の家が見えてきた。

そこには「遠山」と書かれていた。

「ここだ」

「着いたんだね」

「ああ」

「誰がいるの？」

「俺の兄さんだ」

「ふーん、そうなんだ」

「それじゃあ入るぞ…だだいま」

「お邪魔しまあす」

すると中から金一さんが出てきた

「帰ったかキンジ、それと隣の子は…彼女か？」

「ちげえよ！」

「まあ、上がっていけ」

「はーい」

「分かったよ」

「キンジ、お前はお茶などを用意してこい、俺はこの子と話したいからな」

「分かった」

キンジ君が台所のほうへ歩いて行った

第九話

「さてと」

金一さんが話し始めた。

「何でこんなところにいるんだ？お前は伊・Uから抜けたことは知っていたが、まさか武偵中に入っていたとは……伊・Uの連中が知ったらびっくりするだろうな」

「そうですか？私はただ、学校に行きたかったからここに来たんですよ。逆に金一さんは……伊・Uに居なくていいんですか？」

「今は良い」

「今は？」

「そうだ」

「何ですか？」

「俺はな、伊・Uを終わらせようとしているんだ」

「……………」

「俺は2年後の3月に表の世界から消えることにした。より大きな義のためだ」

「その考えは良いことなのかもしれません……その時は私と敵対するということになり

ますが……」

「っ！お前はあそこを抜けたんじゃないか？」

「抜けはしましたけどまだ、ある約束があるから完全に抜けたわけじゃないんです」

「ある約束？」

「それを言うことはできませんが、金一さんが伊・Uと敵対するならば必ず私も敵対するということを忘れないでください」

「……分かった」

「それと……キンジ君のことなんだけど」

「なんだ？」

「キンジ君はHSSの素質がとて高いことが分かったの」

「それは俺も知っている。俺なんかより、初代遠山金四郎よりも才能があるんだ。しかしだな」

「？」

「HSSの発動条件を詳しく言っただけでなかったな。俺たちは、性的興奮によってβエンドルフィンが一定以上分泌されると、神経伝達物質を媒介し大脳・小脳・精髓といった中枢神経系の活動を劇的に亢進される。その結果ヒステリアモード時には思考力・判断力・反射神経などが通常の30倍にまで向上する。遠山家の人間が持つ特異体質。を

「持っているんだ」

「そうなんですか……だからキンジ君は女子が嫌いそうなんですね」

「そうゆうことだ」

「兄さん」

「おう、キンジか」

「何の話をしていたんだ？」

「一つは仕事のことだ」

「じゃあ他にもあるのか？」

「もう一つはHSSのことだ」

「!!」

「彼女にHSSの仕組みを細かく話した。」

「……さすがに気持ち悪く感じただろ？」

「ううん、そんなことないよ！」

「なんでだ？こっちは興奮してんだぞ？」

「それは別に悪気があるわけじゃないから大丈夫。男の子なんてそんな感じでしょ？」

「よかつたなキンジ、このことを理解してくれる女子がいて」

「ああ正直助かる」

「これからもキンジをよろしくな」

「はい。だったら私とパートナーを組まない？ 私がキンジ君を利用しようとする女の子たちから守ってあげるから」

「女に守られるなんて…」

「こればかりは仕方がないぞキンジ」

「……分かった。フラン、お前とパートナーを組むよ」

「ありがとう！ 明日教務課に申請しに行くね」

「分かった」

「今日はおう帰るね」

「うちでご飯を食べてかなくていいか？」

「はい。今日は疲れたのでゆっくり休もうと思つて」

「そうか、じゃあ気をつけろよ」

「ありがとう！ それじゃあ」

ガラガラガラ

フランは行つた

「キンジ」

「兄さん？」

「お前も頑張れよ」

「もちろんだ、早く女に利用されないように頑張るよ」

第十話

次の日

「んん……………ふわあ〜」

時刻は朝7時だ

今日はキンジ君とのパートナー契約をしに行かないとね
私は支度をして学校へ行つた
学校で

「あつおはよう！キンジ君！」

「おはようフラン」

「じゃあ早速教務課に行こうか」

「そうだな」

二人移動中

教務課

コンコンコン

「ん？なんだ」

「パートナー契約をしようと思つて来ました」

「そうか、入れ」

「失礼します」

「失礼します」

「えーつとそれでお前たちはコンビを組むということだな？」

「そうゆうことです」

「お前はまだここに来たばかりだが大丈夫か？」

「はい、キンジ君に教えてもらうんで」

「そうか。じゃあこの紙にそれぞれの名前を書け」

「分かりました」

「それじゃあ、ここにコンビを結成する」

「はい！」

「それじゃあ良いぞ」

「失礼します」

「キンジ君」

「なんだ？」

「これからよろしくね〜！」

「こちらこそよろしくな」

こうして私たちはコンビとなった

私たちはその後多くの依頼を受け、成功していった。

三年の二月

突然私たちは教務課に呼ばれた。

「なんだろう？」

「俺にも分かんらん」

「とりあえず行こっか」

「そうだな」

教務課

コンコンコン

「誰だ？」

「遠山キンジです」

「フランドール・スカーレットです」

「おう入って良いぞ」

「失礼します」

「今日お前たちを呼んだのは…高校生の先輩たちの依頼について行ってもらおうと思つてな、実は東京武偵高から生きのいい奴を出せと言われたんだ。それでお前たちが呼ばれたってことだ」

「依頼は何ですか？」

「麻薬取締だ。高校の諜報科が麻薬組織の位置を特定したらしい。その強襲チームにお前たちも入ってもらおう」

「分かりました」

「………分かりました」

「それじゃあ明日、東京武偵高校に行ってくれ。」

「分かりました」

「キンジ君」

「なんだ？」

「明日は頑張ろうね」

「そうだな」

次の日

「キンジ君おはよう！」

「ああ」

「どうしたの？なんかやる気がなさそうなんだけど……もしかして嫌だった？」

「そりゃあ嫌だろ、先輩だぞ！ヤバい人だらけだろ……お前もつとヤバいかもな」

「そんなことは……多分ないよ」

「間があつたぞ 間が！」

「そ、それよりも行こう」

「話をずらすな」

「まーまー良いじゃん、行こ？」

「……………まあ良いだろう」

二人移動中

東京武偵高教務課

コンコンコン

「ん？誰だ？」

「武偵付属中から来ましたフランドールと」

「遠山です」

「ああー期待の二人やないか、良いぞ入れ」

「失礼します」

「おうおうお前らが噂のコンビか私は蘭豹や」

「噂なんですか？」

「知らんのか？高校でも有名になってきているんやで」

「そんなあゝ」

キンジ君がぼやく

「お前たちが加わってもらおうチームは三年生一人と二年生一人一年生一人とお前から二人の五人チームや」

「結構少ないですね」

「その分チーム数は20ある」

「20!?!」

「そうや」

「ずいぶんと多いですね」

「麻薬犯の中にはなかなかできるやつがいるらしい。さらに中には元警察官などもいる
そうだ」

「マジかよ」

「だからこの人数で畳みかけるといふことや。良いか?」

「分かりました」

「それじゃあ作戦は今日の12時からや。後15分後に集合や。しっかりと準備しとけ
よ」

「「分かりました」」

「ああ、それと」

「なんですか?」

「高校生よりも、良い戦果を挙げたら評価も上がるぞ」

「そうなんですか」

「そうや、じゃあもう行って良いぞ」

「失礼します」

「キンジ君」

「なんだ」

「頑張ろうね」

「そうだな」

「相手ヤバそうだね」

「……そうだな」

「一応なつとく？ H S S」

「いや、いい」

「キンジ君のためだよ、死んじやうかもしれないんだよ」

「……大丈夫だ」

「本当？」

「本当だ」

「じゃあいいや」

「ありがとな」

とその時

「ちよつとくどいてくださ〜い!!!」

「……えっ きやつ!」

「なんだ……うおっ!」

ドシーン!!

なんだか大きなものを運んでいて走ってきた人とぶつかってしまった。

しかしその人は

「ごめんなさい!」 ダダダダ

と言つてなんとぶつかったのに大きな荷物のバランスをとって走り去つていつてしまった。

……今私の上には……キンジ君が覆いかぶさっている。

二人ともぶつかつて倒れそうになったとき頭を打たないように相手の頭に腕を回して倒れてしまった。

私とキンジ君は抱き合う形で倒れてしまったのだ。

「いたたた キンジ君大丈夫?」

「ああ、大丈夫さ」

キンジ君の雰囲気やさつきと違う

「もしかしてHSSなっちゃった？」

「流石だね正解だよ」

「……まっ行こっか」

「ああ！」

キンジ side

俺は憂鬱だった

なぜかって？そりゃあ今から危険地帯に行くんだぞ下手すりゃ死ぬぞ

そんなことを俺が考えていると

「キンジ君」

「なんだ」

「頑張ろうね」

「そうだな」

お前は良いよなく強いから

「相手ヤバそうだね」

「……そうだな」

分かってんのかい

「一応なつとく? H S S」

「いや、いい」

流石にフランの前で何回もH S Sにはなってきたがわざとなることには抵抗がある

「キンジ君のためだよ、死んじゃうかもしれないんだよ」

「……大丈夫だ」

俺の為を思ってくれるのはうれしいが……

「本当?」

「本当だ」

「じゃあいいや」

「ありがとな」

ほんとにお前には感謝しているよ

とその時

「ちよつとくどいてくださーい!!!」

「……えっ きやつ!」

「なんだ……うおっ!」

ドシーン!!

なんだか大きなものを運んでいて走ってきた人とぶつかってしまった。

しかしその人は

「ごめんなさい!」ダダダダ

と言つてなんとぶつかったのに大きな荷物のバランスをとって走り去っていつてしまった。

なんだ!あのバランス力は!?

と考えていると

むによん

?なんだ?

俺が下を見ると

フランがいた

なっ!?!ちよつと待て!

ヤバいだろ

今なんか柔らかかったのは……胸だった

俺とフランは抱き合う形で倒れてしまったんだ

この甘い香り

これを一気に吸ってしまった俺は

ドクン!

一瞬でHSSになってしまった

「いたたた キンジ君大丈夫?」

「ああ、大丈夫さ」

「もしかしてHSSなっちゃった?」

「流石だね正解だよ」

流石にこれだけ一緒に戦つてるとばれてしまうな

「……まっ行こっか」

「ああ!」

俺がHSSになったのに何も言わず一緒にいてくれるのはとてもうれしい

俺もフランの足を引っ張らないように頑張るぞ!

ちなみにフランのランク考査の結果は:

強襲科Sランク

でした!

第十一話

フランク side

私とキンジ君は先生に指定された場所へとやって来た

そこには先輩たちがいた

先輩の一人が私たちを見ると

「全員そろったな。今回の事件は麻薬取引グループの一斉逮捕だ。諜報科の情報によると向こうにも拳銃などがあるらしい。その中には手練れもいるようだから油断しないように。以上だ」

私たちは麻薬取引の撲滅を何回かしたことがあったけどグループになるのは初めてだなあ

私がそう考えると

「フラン、無茶するなよ」

「キンジ君分かってるって、いつも無茶してないじゃん」

「確かにフランが全力で戦っているのは見たことないが、まだ中学生の女の子でもあるんだぞ。そんな子に怪我なんかあったらたまったものじゃない。俺を頼っていいんだ

よフラン」

「キンジ君……」

「まあ忠告はしておいたよ」

「ありがとうねキンジ君」

「それじゃあ行こうか」

「そうだね」

私たちは麻薬取引犯の拠点に来ていた

私たちが中に入ると奥から男が出て来て

「おい……こいつらを足止めしろ」

と言っていた

すると最前線に

まだ10歳にもいかないような子供達が震えながらこちらに拳銃を向けてきた。

先輩の武偵達も意外だったのか動けないでいる。

それもそうだろう子供達は犯罪者なんかじゃない

被害者なのだから

そんな人たちが武偵は撃つことができない

恐らく向こうもそれを分かった上でやっているのだろう
そんな光景を見た私は……キレてしまった

瞬間私は殺気を辺りに広げた

子供達、犯罪者、武偵までもが私を見ている

「フ、フラン？」

キンジ君が聞いてくる

キレていた私は

「何？キンジ君？」

殺気を込めた返事をしてしまった

「ツ！落ち着け！」

そう言うがもう遅い

私は子供達の方へと歩き始めた

キンジ side

まさか奥から子供達が出てくるとは思ってもみなかった。

これをどうしようかと俺が考えていたら俺のすぐ隣から殺気が膨れ上がった。

言うまでもない

フランだ

しかし俺が今まで見てきた中で最も危険なレベルだ

このままでは誰か殺してしまわないか心配になる程だ

なので俺は

「フ、フラン？」

フランに声をかけた

すると

「何？キンジ君？」

いつものような優しい声ではなく殺気のコもった返事だった

俺は気押しされながら

「ツ！落ち着け！」

言ったがフランはそのまま歩いて言ってしまった

俺にはどうすることもできないのか……

そう思いながら歩いて行くフランをただ見ることしか出来なかった

フラン side

とりあえず子供達に傷をつけないようにしないとダメだね

キレていてもそれくらいは判断できる

男が

「ツ！あいつを撃て！」

と言っている

子供達が震えながらこちらに拳銃を向けた

しかし私は

子供達が持つている拳銃全ての「眼」を同時に

「キュツとしてドカーン！」

破壊した

子供達に怪我はない

子供達が地面に座り込んでしまった

そこを私は通って男の場所へと向かう

私は男に

「ねえ、あなたは今までどれだけの子供達をこうしてきたの？」

「あ？知らねーなあ、子供なんて所詮売り物だ」

そんなことを言っている

だったら遠慮はいらないね

「じゃああなたにも地獄を見てもらうよ」

私は男に幻術をかけ

「消えたところは無理やり再構築」

と言つて

「じゃあ始めるね」

と

「ぎゃあああああああああああ！」

男の四肢が吹っ飛んだ

しかし

グチャグチャと音を立てながら直されていく

なので

「キュツとしてドカーン！」

次は腰から下を吹っ飛ばした

次は首を

次は頭を

ドカーン

しかし男の体は無理やり再構築されていく

死ねない地獄を味わっているところだろう

もちろん失神もできないようにしているんだからねく

そんなやりとりを15分程

すると

「フ、フラン……そろそろやめろ」

キンジ君が言ってきた

「なんで？」

「流石にやり過ぎだ」

「うーん……まあいっか」

「術式解除」

バタン

男は失神した

そして男はそのまま武偵高の尋問室に連れていかれた

その後私は武偵高の尋問室に呼び出されていた

「おまえ……何をした？」

「うーん、いじめただけですよ犯罪者を」

「こいつがPTSDになっっているんだが……」

「それは仕方がないんじゃないですかね？」

「まあ深くは聞かないようにするとしてお前……来年武偵高に必ずこいよ」

「分かりました！」

「じゃあ言っつていいぞ」

「失礼します」

こうして私の中学校生活が終了していった